

日本人学習者によるイタリア語冠詞の習得と使用について

－上級学習者に関する考察－

丸田 美香

Mika Maruta

はじめに

本稿の目的は、日本人学習者の第二言語としてのイタリア語習得過程において、とりわけ、上級学習者の冠詞の使用と習得について明らかにすること及び、その結果から得られる知見をもとに学習法や教材開発についても考察を行うものとする。¹⁾

冠詞は、イタリア語学習の初期に指導される項目であるが、先行研究にもあるように、学習者にはその使用の規則がいつまでも不確実のまま残る語である(Nannini 2007、20)。ゆえに、冠詞の正しい使用については、上級レベル/イタリア語母語話者のレベルに達した成人学習者をも悩ませるものであると言われている。従って、研究の対象となる被験者のレベルは、欧州評議会のヨーロッパ言語共通参照枠及び、シエナ外国人大学主催の CILS イタリア語検定試験で定められた、C2（熟達した言語使用者）レベルに達した者とする。²⁾ 上級レベルの学習者は、冠詞が名詞の性と数に一致して活用することや、ある特定の子音で始まる名詞につける冠詞の選択など、文法的な用法の処理能力は既に備えており、冠詞に関する問題文を解く際のエラーはほぼないと言える。その一方、実際の会話や作文においては母語話者とは異なり、冠詞の感覚が曖昧なまま使用されると言われる。

このような上級学習者の冠詞使用に関して、本稿では、言語コーパスを作成し、書きことばと話しことばにおける冠詞使用の量的調査を行うことにより、冠詞の運用能力を明らかにしていく。

そしてさらに、冠詞エラー割合のデータをもとに、不定冠詞、定冠詞に二分化し、エラー別に統計をとった上で質的調査を行い、冠詞エラーの背景とパターンを検証することとする。

コーパスの概要

1993年6月から2007年6月までのCILSイタリア検定試験のC2レベル合格者を被験者とし、検定試験時の記述（作文）問題と録音資料である口頭試問の解答を文字化したものに基づく55140語（書きことば22650語、話しことば32490語）を収録したコーパスを作成し分析する。³⁾ 初年度第1回検定試験から2007年6月の第29回試験までに合計72名の日本人学習者が合格しており、本コーパスはイタリアで義務教育を受けた受験者、データが揃わないものを除き、最終的に60名のテキストを収録している。⁴⁾ この60名の合格者は日本で義務教育を受け、イタリアまたは日本で第二言語としてイタリア語を学習した22歳から47歳の成人学習者（女性53名、男性7名）である。学習者の年齢と性別をまとめたものを表1に示す。

表1 学習者の年齢と性別

	22-25 歳	26-30 歳	31-35 歳	36-40 歳	41-45 歳	46-47 歳	
女性	4	20	14	6	6	3	合計 53 名
男性	2	2	0	0	3	0	合計 7 名

分析されるテキストの内容は、検定試験の課題として与えられたそれぞれ 2 種類の書きことば（与えられたテーマに基づいた 200-250 語の自由作文、特定のルールやマナーに基づいたフォーマルな 120-150 語の通信文）と話しことば（与えられたテーマに基づいた試験官との 3-4 分間の会話、与えられたテーマについて 2-3 分間の試験官との受け答えのない陳述）である。⁵⁾

データの分析・結果

被験者の冠詞使用の分析においては、エラーの環境や状況も考慮しつつ分析を進めることが必要となる。それゆえ、書きことばと話しことばに分けた上でそれぞれ正しく使われた場合と使用エラー（冠詞が不必要な文脈に冠詞が用いられた濫用エラー、定冠詞を必要とする文脈に不定冠詞を用いる、またはその逆といった誤用エラー）、脱落エラー（冠詞を必要とする文脈における冠詞の脱落）に分けてコーパスの量的な比較をしたものを表 2 に示す。⁶⁾

表2 冠詞の使用に関する数値-書きことばと話しことばの対比

	書きことば	話しことば
正しい冠詞の使用	3024 件 (85%)	2722 件 (75%)
使用エラー	365 件 (10%)	310 件 (8%)
脱落エラー	167 件 (5%)	601 件 (17%)
	合計 3556 件 (100%)	合計 3633 件 (100%)

書きことばの分析結果によると、コーパスに登場する全ての冠詞の 85% が正しく使われている。使用エラーの内訳を見ると、定冠詞の使用エラー 38% (204 件)、冠詞前置詞のエラー 22% (119 件)、不定冠詞のエラー 7% (36 件) となり、部分冠詞においては 1% (6 件) とごくわずかなエラーがあった。また、書きことばコーパスにおいて最も多かった使用エラーは、冠詞が不必要な文脈に定冠詞が用いられる濫用エラーであった。これについては、英語の第二言語習得の研究者の間でも、日本人学習者が特に中級後期から上級初期の段階で冠詞、主に定冠詞を使用し過ぎる傾向があり、中間言語発達の終結点に向かって徐々に減少するが、完全には消滅せず中間言語の発達過程の最後まで執拗に残ると認識されている (水野 2000)。

また、書きことばにおいては、学生は書いたものを再度読んで内容をじっくりと吟味したり、曖昧な点を書き直すなど熟考する時間があるため、その正確度も高まる。さらには、学習者は表現する際に

用法が曖昧な場合にはその使用を避けたり、使いこなすことができる表現のみを利用することも考慮されなければならない（回避ストラテジー）。しかしながら、中間言語発達に伴い、学習者の冠詞への注意心も高まることから、脱落エラーを避けるあまり、反対に冠詞が不必要な文脈に冠詞を用いる濫用エラーが多く見受けられたのが特徴である。表 3 は、書きことばの冠詞エラーに関する結果をまとめたものである。

表 3 冠詞エラーに関する数値－書きことば

定冠詞のエラー	204 件 (38%)	122 件 (60%) 濫用エラー 59 件 (29%) 誤用エラー 23 件 (11%) その他エラー(性の選択、il/lo 等の選択)
冠詞前置詞のエラー	119 件 (22%)	74 件 (62%) 濫用エラー 17 件 (14%) 誤用エラー 28 件 (24%) その他エラー(性の選択、il/lo 等の選択等)
不定冠詞のエラー	36 件 (7%)	11 件 (31%) 誤用エラー 9 件 (25%) 濫用エラー 8 件 (22%) 綴りのエラー(省略形 un/un') 8 件 (22%) その他エラー(性の選択、un/uno の選択等)
脱落エラー	167 件 (31%)	76 件 (46%) 冠詞前置詞の脱落(前置詞のみ使用) 59 件 (35%) 定冠詞の脱落 20 件 (12%) 不定冠詞の脱落 12 件 (7%) その他エラー(部分冠詞等)
部分冠詞のエラー	6 件 (1%)	

これに反して、書きことばに比べ、話しことばにおいては、学習者は状況に応じて即座に考えて発話し、つねに流動的な「場面」展開に対応しなければならないことから、文法への意識が薄れる。このため、無冠詞言語を母国語とする学習者特有の冠詞の脱落が多く現れる結果となった。

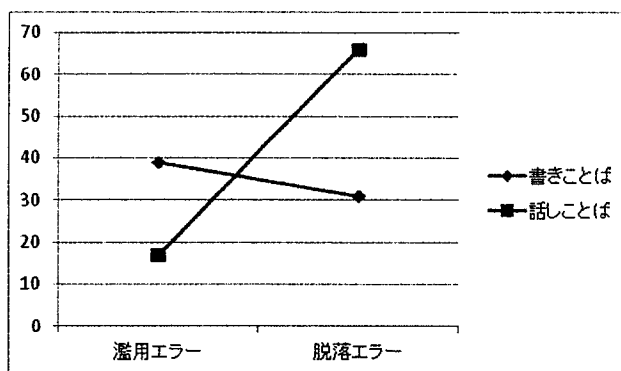
表 4 冠詞エラーに関する数値－話しことば

定冠詞のエラー	163 件 (18%)	83 件 (51%) 濫用エラー 45 件 (27%) 誤用エラー 35 件 (22%) その他エラー(性の選択、il/lo 等の選択)
冠詞前置詞のエラー	95 件 (10%)	61 件 (64%) 濫用エラー 11 件 (12%) 誤用エラー 23 件 (24%) その他エラー(性の選択、il/lo 等の選択)
不定冠詞のエラー	41 件 (5%)	17 件 (41%) 性の選択のエラー 12 件 (30%) 誤用エラー 10 件 (24%) 濫用エラー 2 件 (5%) その他エラー(un/uno の選択等)
脱落エラー	601 件 (66%)	319 件 (53%) 冠詞の脱落 165 件 (27%) 冠詞前置詞の脱落(前置詞のみ使用) 101 件 (17%) 不定冠詞の脱落 16 件 (3%) その他エラー(部分冠詞等)
部分冠詞のエラー	11 件 (1%)	

ここで、最も多かったエラーは冠詞の脱落エラーとされた。水野（2000、80）は、「中間言語発達の初級レベルおよび、中級レベルにおいて、日本の成人の英語学習者は頻繁に冠詞を脱落させるであろう。この種のエラーは、上級レベル初期までに急激に減少するが、完全に消滅することなく中間言語内にいつまでも残ると考えられる」、また「冠詞の忘却エラーは無冠詞言語を母語とする学習者の発達プロセス内に執拗に残る」（水野 2000, 124）と言及する。表 2 で示したように、話しことばに関しては、コーパスに登場する全ての冠詞の 75% が正しく使われている。表 4 は、話しことばの冠詞エラーに関する結果であり、使用エラーの内訳を見ると、脱落エラー 61%（601 件）、定冠詞のエラー 18%（163 件）、冠詞前置詞のエラー 10%（95 件）、続いて不定冠詞のエラー 5%（41 件）、部分冠詞のエラー 1%（11 件）となっている。

量的データの分析について、書きことばと話しことばに分け、冠詞の濫用エラーと脱落エラーの比較のまとめを示したものが以下の表 5 である。書きことばでは、目立たなかった脱落エラーの数値が話しことばにおいては、大きくなっている結果がグラフに表れている。

表 5 濫用エラーと脱落エラーに関する話しことばと書きことばの対比



	書きことば	話しことば
濫用エラー	205 件 (39%)	158 件 (17%)
脱落エラー	167 件 (31%)	601 件 (66%)
その他のエラー	160 件 (30%)	152 件 (17%)

質的データ分析の結果

調査されたデータからは、冠詞使用に関する文法的な誤りや問題点のある多数の文が抽出された。質的データの分析を試みるにあたって、前述した量的データ分析とは異なり、書きことばのみについて検証することとする。ついては、書きことばのコーパスのエラーのデータをまず大きく不定冠詞と定冠詞に二分化し、それぞれ濫用、誤用、脱落の 3 つの種類のエラーの統計がとられた。脱落エラーは

定冠詞または不定冠詞の脱落であり、濫用エラーに関しては不定冠詞または定冠詞が不必要な文脈でそれらが使用されたものである。冠詞前置詞についてもエラーは前置詞の選択ではなく、定冠詞の有無によるエラーとされるため、それらを伴った文も含めてエラーを区別する。このようにエラーを区別することにより「不定」と「定」の側面から学習者の冠詞使用における分析を進めることが可能となる。書きことばコーパスのみによるエラーの内容を量的に示したものが表5である。

表6 書きことばコーパスのエラー 不定冠詞と定冠詞の対比

冠詞の種類	不定冠詞			定冠詞		
エラーの種類	濫用	誤用	脱落	濫用	誤用	脱落
頻度	9	11	20	185 (69)	76 (17)	143 (74)

() 内の数字は冠詞前置詞を示す。

以下、この量的結果から質的データ分析を行うものとする。ここでは、最も多かったエラーの背景をいくつか検証し、例文を挙げるものとする。⁷⁾

(1) Sintagma nominale determinato

書きことばコーパスの分析を通して得られた結果の中で、最も多かったエラーの背景は、Sintagma nominale determinato (定の名詞句) においてであった。この背景の中で最も多く見つけられたエラーは、定冠詞の脱落エラー75件であり、その中でも定冠詞の脱落エラーが36件、前置詞のみを使用した冠詞前置詞のエラーが39件となっている。また、定冠詞を必要とする文脈に不定冠詞が使用された誤用エラーは8件のみとされた。

例)

1. *Si studiano delle materie generiche per [il] primo anno* (定冠詞の脱落)
2. *Sono laureato in lettere con la tesi di laurea (su) sul romanticismo* (冠詞前置詞の脱落—前置詞のみ使用)
3. *All'inizio del gioco è difficile indovinare (una) la carta giusta perché tutte le carte sono coperte* (定冠詞を必要とする文脈に不定冠詞の誤用)

以上の結果は、冠詞を持たないという母国語からの干渉が大きな原因となり、中間言語の発達過程の初期段階からみられる冠詞の脱落エラーが上級レベルの段階においても化石化して残っているものであると考えられる。⁸⁾ (60名の被験者のうち40名が同様のエラーをしており、1回のみエラーをした被験者から最大10回繰り返してエラーしている被験者までが確認された)。

(2) Sintagma nominale indeterminato specifico /non specifico

次に多かった冠詞の使用に関するエラーの背景は、Sintagma nominale indeterminato specifico /non specifico (不定の名詞句) においてである。この不定の名詞句のエラーを二点の用法 1) 話し手には

名詞の指すものが既知、聞き手には未知の情報である特定の用法、2) 話し手にも聞き手にも名詞の指すものが未知の情報の場合である非特定用法の中に見てみる。この両者における不定の名詞句では前述の定の名詞句に比べ、冠詞の脱落エラーは 16 件と少ないことがわかった。エラーの中で最も多かったのは、不定冠詞が必要な文脈に定冠詞を用いる誤用エラー (48 件) であった。続いて、冠詞前置詞が必要とされる文脈において「前置詞＋不定冠詞」が用いられたケースも (17 件) 確認された。

例)

1. *L'importante è trovare [un] lavoro che ci piaccia* (不定冠詞の脱落)
2. *Essendo nata (nel) in un paese abbastanza tranquillo e ricco, fortunatamente o sfortunatamente, non ho tante occasioni per conoscere la realtà e le situazioni che esistono nel mondo* (「前置詞＋不定冠詞」と冠詞前置詞の誤用)

60 名中 38 名の学習者がこの種のエラーをしており、また、コーパス内で 1 回のみエラーをした被験者から 6 回繰り返してエラーしている被験者までが確認された。

(3) Sintagma nominale né determinato né indeterminato

一般に、冠詞が必要でない名詞句には様々な状況があるとされるが、Sintagma nominale né determinato né indeterminato (冠詞をとらない「不定」でも「定」でもない名詞句) において、冠詞の濫用エラーが多く見られたのが特徴であった。先に挙げた (1) (2) の背景に比べ、用法の多様性に伴いここで一定の規則を挙げるのは非常に困難とされるが、例えば、前置詞＋冠詞をとらない名詞句 (di＋名詞句、in＋名詞句、a＋名詞句、V＋名詞句など) が挙げられる。

例)

1. *Godò (della) di ottima salute* (濫用)
2. *Sono nati altri problemi che non erano presenti (nel) in passato* (濫用)

60 名中 35 名の被験者がこの種のエラーをしており、また、コーパス内で 1 回のみエラーをした被験者から 4 回繰り返してエラーしている被験者までが確認された。

(4) Assenza di articolo nel Sintagma nominale indeterminato non specifico plurale

次に、Assenza di articolo nel Sintagma nominale indeterminato non specifico plurale (非特定の用法の不定の名詞句で複数形をとる場合) において、定冠詞の濫用エラーが多いことが確認された。

例)

- ・ 動詞の後にくる主語の働きをする名詞句 (15 件):
Anche nel mio paese ci sono (i) programmi simili
- ・ 目的語の働きをする名詞句 (35 件):
ho cercato (gli) altri posti per parcheggiare la macchina

このような背景において、被験者は、頻繁に定冠詞を用いる傾向があるとされた。60名中33名の被験者がこの種のエラーをしており、コーパス内で1回のみエラーをした被験者から4回繰り返してエラーしている被験者までが確認された。従って、上級学習者においてはこのような構文の背景における冠詞の使用に関する理解が大いに必要とされる。

以上、(2)と(3)の誤用エラーと濫用エラーの結果に関しては、ネイティブスピーカーのインプットの中で定冠詞が比較的現れやすい「=学習者にとって気づきやすい」ものであると考えられる。その結果、学習者はそれに基づいて、必要以上に「使うべきだ」と誤った判断をする可能性があると言え、特にその区別の基準をはっきり理解していなければ、エラーが起りやすい現象だと言える。また、(4)の結果についても(2)(3)と同じことが言えるはずであるが、逆に、(4)のような非特定の用法の不定の名詞句で複数形をとる場合の名詞句に冠詞が使われていない際は、どこまで学習者の判断で意識的に冠詞をつけないのか、脱落の傾向が強い中で、その脱落エラーの「基準」(=中間言語)とイタリア語の基準が重なる可能性も考えられるのではないだろうか。

結論

被験者は、イタリア語習得過程において母国語にはない文法事項に対して十分な問題意識を有し、言語運用能力を発達させていることが確認できた。先述したように、書きことばにおいては、学習者の冠詞への意識も高まることから、脱落エラーを避けるあまり、反対に冠詞が不必要な文脈に冠詞を用いる濫用エラーの多発が特徴となる。一方、話しことばにおいては、冠詞の脱落が顕著であることが分かった。

Berruto, Moretti, Schmid (1990, 214-215)のスイスのドイツ語圏におけるイタリア語習得過程に関する報告によると、イタリア語の文法習得においては、不定冠詞が先に習得され且つ定冠詞に比べ比較的的理解され易いと言われている。また、Chini, Ferraris (2003)のイタリア国内の外国人学習者を対象としたイタリア語習得における研究によると、不定冠詞については習得が先に成されたにせよ、それが正しい使用に伴うとは限らないことが言及されている。実際に本研究のコーパス調査においてそれらの正しい使用を検証した際、定冠詞に比べ不定冠詞の使用頻度とそれに関するエラーの数値は低いものとされている。また、書きことばにおいては、定冠詞のエラー38%に対して不定冠詞のエラーは7%となっている。もちろん、本研究では学習者はすでに上級レベルに達しているため、定冠詞と不定冠詞のどちらを先に習得したかを調査することは明らかに不可能である。その目的は、あくまでも上級者レベルに達した学習者の冠詞運用能力を調査することによって、母語話者のように冠詞を操ることができるか、といった冠詞機能の理解への問題点を探ることにある。しかしながら、本調査においてもChini, Ferrarisの言及に似た結果が得られたのが特徴であり、結果を以下にまとめる。

1) エラーの数値に関しては不定冠詞がはるかに低くなっているが、濫用、誤用、脱落エラーを除いたその他のエラーの内訳を考察してみると、性の選択、綴りのエラー(アポストロフィーによる省略形 *un/un'* など)が、不定冠詞では44%、定冠詞では11%と比率が高くなっている(表3参照)。2)

書きことばでは不定冠詞の綴りのエラーが目立っている。3) 話しことばでは、不定冠詞の性の選択に関するエラーが顕著である、という結果が得られた。

また、類型論から見た日伊両言語の相違といった観点から、Nannini (2007) は、母国語にできるだけ近い基準を利用しながら、日本人学習者にとって分かりやすい定性概念の対象学的アプローチを提案している。例えば、未知/既知の事柄を表す際の冠詞の選択に関しては日本語の助詞と対応することもあり、日本人学習者にも比較的理解や習得がし易い。⁹⁾ 一方、日本語母語話者からすれば不要と思われる、日本語対応のない冠詞の使用においては、脱落が発生し易く、その学習法においていくらかの注意が払われることが要される。

以上の結果、上級学習者向けの学習法や教材開発の考察に関する課題として、猪浦 (2007, 101) が示すよう日本語文において「不定」「定」の観念を学習者に熟考させるアプローチなど、「不定」と「定」の概念を絶えず意識、熟考することにより、学習者は日本語母語話者にはない文法カテゴリーにもより慣れることができるのではないか。また、冠詞の濫用エラーに関しては、統語構造の側面からの演習やアプローチが望ましいと考えられる。

最後に、参考資料としてコーパス資料から得た例文を使用した冠詞に関するいくつかの演習問題例を提示する。

参考資料－演習問題の例

(1) Sintagma nominale specifico における定冠詞の演習文例 (脱落エラーのため)

次の文章のうち、冠詞が必要な場合は[]内に適当なものを入れよ。

- Penso che sia [] <momento> di riflettere se introdurre la specializzazione al liceo.
- [] <problema> del nostro sistema formativo consiste nel fatto che la specializzazione viene molto tardi.

(2) Sintagma nominale specifico における前置詞を伴う定冠詞の演習文例 (脱落エラーのため)

次の文章のうち、適当な場合を選択せよ。

- Nonostante passino i camion [di/della] <nettezza urbana> tre volte la settimana le immondizie si buttano subito via.
- È una specializzazione insufficiente al momento [di/della] <laurea>.

(3) Sintagma nominale indeterminato における不定冠詞の演習文例 (脱落エラーのため)

次の文章のうち、冠詞が必要な場合は[]内に適当なものを入れよ。

- Gli studenti universitari continuano a studiare in [] <corso post-universitario>.
- Secondo me proporre atteggiamenti aggressivi ha [] <effetto> negativo sugli spettatori.

(4) Sintagma nominale indeterminato における不定冠詞/定冠詞の演習文例 (誤用エラーのため)¹⁰⁾

次の文章のうち、[]内につける冠詞が「定」または「不定」か選択せよ。

- 私は2年前から[定/不定]<定職>を見つけるのに非常に困難を感じている。
(Ho grande difficoltà nel trovare [il/un] <lavoro fisso> da due anni.)

(5) Sintagma nominale specifico における不定冠詞/定冠詞の演習文例 (誤用エラーのため)¹¹⁾

次の文章のうち、[]内につける冠詞が「定」または「不定」か選択せよ。

- [定/不定]<差額>の返金を申請します。

(Chiedo [un/il] rimborso della differenza.)

(6) Sintagma nominale indeterminato non specifico plurale における演習文例 (濫用エラーのため)

次の文章のうち、冠詞が必要な場合は[]内に適当なものを入れよ。

動詞の後にくる主語の働きをする名詞句:

-Immagino che ci siano [] diverse <ragioni> per cui i ragazzi rimangono dai genitori.

-Anche nel mio paese ci sono [] <programmi simili>.

目的語の働きをする名詞句:

-Se i giovani non trovano lavoro, di conseguenza, non fanno [] <figli>.

-I bambini hanno bisogno di stare con gli altri bambini per imparare [] <tante cose>.

注

¹⁾ 冠詞研究に関しては、一般に冠詞の機能的、通時的、類型的な理論言語学に関する研究がイタリア及び日本でも数多い。Renzi (1976, 1988)、Serianni (1989)、猪浦 (1986)、古浦 (1996)。また、冠詞を含めた名詞形態論に関する研究は Chini (1995)、Chini, Ferraris (2003) を参照されたい。一方、言語習得学、外国人へのイタリア語教育から見た冠詞の教授法に関する研究 Lo Duca (1991, 1994, 1995)、Nannini (2007)、猪浦 (2007) は他言語に比べ少ないと言える。近年、日本でもイタリア語の参考書は数多く出版されているが、イタリア語教育の現場においては、英語学習者向けの冠詞マスターを専門とした参考書のような出版物に関しては極めて数が少ない。このことから、本論文ではイタリア語冠詞の文法機能ではなく、冠詞の教授法、言語習得学の観点から研究を進めることとする。

²⁾ CILS イタリア語検定試験のレベルは、欧州評議会のヨーロッパ言語共通参照枠で設定された 6 つのレベルの言語コミュニケーション能力 (A1, A2, B1, B2, C1, C2) に分かれている。Centro CILS (2009)、Vedovelli (2005) 参照。

³⁾ 話しことばコーパス作成にあたっては、調査資料の文字化に関して LIP-Lessico di frequenza dell'italiano parlato (1993, 45-50) が示す原則に従った。

⁴⁾ 2007 年 12 月から 2013 年 12 月の検定試験では、新たに 60 名が C2 レベルに合格しており、検定試験開始から現在に至り合計 132 名が合格している。また、検定試験は年に 2 回 (6 月と 12 月の月初め) イタリアおよび世界各国で同日に実施している。

⁵⁾ Scaglioso (2005) 参照。

⁶⁾ エラーの分類に関しては、Richards (1974, 186-187) によって提示された冠詞の使用上のエラーを参照した邦語 (水野 2000: 48-49) を使用する。

⁷⁾ 冠詞の用法に関しては、Renzi (1976, 1988)、猪浦 (1986)、古浦 (1996) を参考にした。

⁸⁾ 化石化とは、中間言語の特徴であり、学習者言語の一部が不完全なまま発達を止め、そのまま定着してしまう現象とされ、Selinker (1972) に言及されたもの。

⁹⁾ Nannini は、母語にできるだけ近い基準を利用しながら、日本人にとって分かりやすい定性概念の対照言語学的アプローチを提案する。Nannini (2007) 参照。

¹⁰⁾ 猪浦 (2007) 参照。ここでは猪浦の提示する演習問題を参考にし、伊文に併せて日本語文からの演習と「不定」「定」の概念を熟考させるアプローチを用いる。

¹¹⁾ 同上

参考文献

- 猪浦道夫 (1986) 「イタリア語冠詞論－冠詞機能分析方法の提案－」 『ロマンス語研究』 19 ロマン
ス語学会 pp. 9-22
- 猪浦道夫 (2007) 『イタリア語 冠詞』 鋭脳
- 古浦敏生 (1996) 『イタリア語における冠詞研究』 文流
- 水野光晴 (2000) 『中間言語分析 英語冠詞習得の軌跡』 開拓社
- Berruto G., Moretti B., Schmid S., 1990, *Interlingue italiane nella Svizzera tedesca. Osservazioni generali e
note sul sistema dell'articolo*, in E. Banfi, P. Cordin (a cura di), *Storia dell'italiano e forme dell'italianizzazione.
Atti del XXIII Congresso Internazionale di Studi*, Trento-Rovereto 18-20 maggio 1989, Roma, Bulzoni, pp. 203-
228.
- Centro CILS (a cura di), *Linee guida CILS*, Perugia, Guerra Editore.
- Chini M., 1995, *Genere grammaticale e acquisizione. Aspetti della morfologia nominale in italiano L2*, Milano,
Francoangeli.
- Chini M., Ferraris S., 2003, *Morfologia del nome* in A. Ramat Giacalone (a cura di), *Verso l'italiano*, Roma,
Carocci, pp. 37-69.
- De Mauro T., Mancini F., Vedovelli M., Voghera M., 1993, *Lessico di frequenza dell'italiano parlato*, Milano,
ETASLIBRI.
- Lo Duca M. G., 1991, *Ipotesi sull'articolo*, "Italiano & oltre" VI, 5, Firenze, La Nuova Italia, pp. 240-241.
- Lo Duca M. G., 1994, *Il 'noto' e il 'nuovo' degli articoli*, "Italiano & oltre" IX, 5, Firenze, La Nuova Italia, pp.
273-275.
- Lo Duca M. G., 1995, *Sono due o tre i tipi di articolo?*, "Italiano & oltre" X, 1, Firenze, La Nuova Italia, pp. 25-
27.
- Nannini A., 2007, *L'apprendimento dell'articolo italiano in studenti giapponesi: un approccio contrastivo e
alcune proposte didattiche*, "Studi Italic", Tokyo, Italia gakkai, pp. 20-47.
- Renzi L., 1976, *Grammatica e storia dell'articolo italiano*, "Studi di grammatica italiana", vol. 5, Firenze, pp. 5-
42.
- Renzi L., Salvi G., Cardinaletti A. (a cura di), 1988, 2001, *Grande grammatica italiana di consultazione*, vol. I,
Bologna, Il Mulino.
- Scaglioso A., 2005, *La valutazione della abilità di produzione scritta e di produzione orale* in M. Vedovelli (a
cura di), *Manuale della certificazione dell'italiano L2*, Roma, Carocci, pp. 217-288.
- Selinker L., 1972, *Interlanguage*, "International Review of Applied Linguistics", 10/2, pp. 209-231 (trad. It. In
Arcaini, Py, 1984, pp. 25-47).
- Serianni L., 1989, *Grammatica italiana. Italiano comune e lingua letteraria*, Torino, UTET Libreria.
- Vedovelli M. (a cura di), 2005, *Manuale della certificazione dell'italiano L2*, Roma, Carocci.